私の經歷は、御承知のことゝは思ひますが

一、宇治火藥製造所々員
二、板橋火藥製造所々員
三、岩鼻火藥製造所所長代理
四、目黑火藥製造所長
五、東京砲兵工廠庶務課長
六、火工廠作業課長
七、板橋火藥製造所長
八、陸軍造兵廠技術部長
九、陸軍造兵廠總務部長
十、陸軍造兵廠作業部長
十一、陸軍造兵廠火工廠長

を歷任致しました。尙此間に於て海外にも出張致し、技術會議々員、陸軍軍需審議會議員をも勤め、幸ひ大過なく今日に至りましたことは、全く先輩各位の御指導と、從業員御一同の御後援によるものでありまして、重ねて深く御禮を申上ぐる式第であります。

昨春不幸にして病氣に罹り、引續き療養中でありましたが、醫官の懇切なる治療と、大方各位の御同情によりまして、御覽の通り大體に於て輕い運動や、日々の業務に堪へ得る樣になりました。然しまだ、完全とは行きませんので、今回の恩命を機會に一層の療養を致しまして、全快を期したいと思うて居ります。

諸君、不肖今陸軍を去るに當りまして、幾多の感想が湧きますが、就中私が、明治、大正、昭和の三朝に奉仕致しまして、然も幸運にして今日の榮譽を得ましたことの感謝と、從業員一同に對する惜別の念が最も顯著なるものであります。

私は造兵廠に於きまして、何等功績を殘して居りませんが、只努力したと思ひますことは

一、技術的方面では、茶褐藥の試驗研究と、無煙小銃藥の表面硬化法の研究でありまして

二、事務的方面では、職工代表者制度の强化擴大と、退職賜金算定基礎確立の件でありました。火工廠五千人の諸君、どうか健康に注意せられ、心身を一層に練磨し、此の國家非常時を難なく退治出來ます樣、御舊闘あらんことを祈ります。別れに臨み、一言所感を述べて御挨拶と致します。終り。

昭和八年三月二十日

長谷川少將

僕は退職に際し、高等官一同より、裝飾用蓄音機附ラヂオ臺を、又判任官雇員一同より、置物と寫

眞機械を饌別として贈られた。僕は記念として永く保存し、其芳志は忘れぬ積りである。

第十七、退職後閑居生活と時事問題

僕は退職後

一、三月三十一日、退職賜金を賜り

二、四月一日、豫備役仰付けられ

三、四月二十八日、特旨を以て位一級を進められ、正四位に敍せられた。又

四、六月三日附を以て恩給證書の交附を受くることにより、

茲に現職中の勤勞に對する一切の賞賜を受け終り、純然たる閑居生活に入つた。然しまだ五十五歳で、老年と云ふ年でもなく、然もからだの調子は悲觀すべきでなかつたので、久村少將の勸めらるゝまゝに、九月一日より約二年間の約束で、旭電化工業會社に顧問として服務することゝなつた。同會社は本社を丸の内に置き、工場を尾久町九丁目に設け、電氣化學工業に關する製造品を造る所で、主なる製造品として、

一、食鹽の分解によつて得らるゝ苛性曹達と

二、同じく鹽素を利用する、酒粉、液體鹽素

三、同じく水素を利用する硬化油

四、進んで硬化油を原料とする石鹼の製造等で

東京では二、三と下らぬ此種の大會社だつた。

社長は、鈴木市之助氏

專務は、磯部愉一郎氏

技師長は、藤堂良讓氏

工場長は、浦野三郎氏で

何れも練達堪能の圓滿なる人物揃であり、僕等は常に明るく氣持よく勤むるを得た。僕は主として尾久工場にあつて、

一、警戒に關すること、

二、危險豫防に關すること

三、衞生事項、及び

四、安全週間、防空施設に關する計畫と實施に任じ、時々浮んだ

五、工場經濟に關する意見をも開陳したが、昨年十月より期限滿了となり、名譽顧問として今日に至つてゐる。

僕は十年九月十八日、滿洲事件及上海事件の功により、勳二等瑞寶章と金千圓を賜はり、併せて從軍記章を授けられた。尙大滿洲國建國記念章をも受くるの光榮を得た。之にて僕の勳章記章は總數十二個となり五十八年の過去を語る思ひ出となつた。

一、勳二等瑞寶章
二、勳四等旭日小綬章
三、功五級金鵄勳章
四、明治三十七、八年從軍記章
五、大正三年乃至九年戰役從軍記章
六、昭和六年乃至九年事變從軍記章
七、大正三年乃至九年世界大戰戰捷記念章
八、大正四年大禮記念章
九、昭和三年大禮記念章
十、帝都復興記念章
十一、大滿洲國建國記念章
十二、日本赤十字社社員章

僕は趣味として音樂や、遊藝にかけ關心を持たぬではない。僕は中學時代に、月琴を彈き、砲工學校時代に、風琴を弄んだ。又板橋時代に、筑前琵琶をも稽古した、其他トランプも遊び、花かるたもやり、玉突又た盛んに突いた。更に戰地では、義太夫も敎はり、圍碁もざる中のざるだが、やる事はやつた。然し何一つとして上手と云ふものがない。强いて云へば、トランプだけが、多少自信がないではない。僕は母の感化を受け、子供の時より唄や、三味線を喜んで聞いた。それで何とはなしに、興味を感ずる樣になつた。

妻も、どちらかと云へば、藝ごとは好きな方で、音樂又然りである。妻は手藝に特別の趣味を持ち、家庭絞り染や、編物、ミシン刺繍、盆栽、挿花などに、隨分こつた。又謠曲は中年から、十年近くやつた程で、要するに僕の家庭は、日本趣味が多分に取り入られ、從つて末子の英子も、七歲の時より師匠、花柳壽代氏につき日本舞踊を稽古した。幸ひ師匠の熱心なる仕込みと本人の氣性とにより、面白い程上達し、幼稚園や、川村女學院の集會にも餘興として出場するまでになつた。然し好事魔多しで、九年十一月、稽古後二年半にして、突然師匠の商賣換に遇ひ、計らずも中止するの已むなきに至つた。聞けば、師匠も一身上の關係で致し方がなかつた。僕は此時、他の師匠をと考へもしたが、中々適當の人が見當らない、のみならず英子唯一人の爲めに、わざわざ出稽古も業々しくはあり、一考を要した。元來舞踊は、進むに從ひ深入りするのが普通で、次第に藝人的傾向が濃厚となる

ので、僕等の家庭としては子供でこそ、面白味もあり、保健上にも有意義だと思ふが、之が家庭人となるべき筈の中娘になれば、さほど有益とも思はれなくなつた。斯る考より一層一思ひにと斷然放棄することにしたが、只然し長唄と三味線のみは、將來家庭の人となるも、反て慰安の一方法であると考へ、引續き繼續することにした。其後暫く池袋なる杵屋榮美七先生につき一ヶ年通はせたが、學校通學上の不便あり、之又中止の已むなきに至つた。次で、

第三人目として迎へたのが、今の師匠で、杵屋六勢津と稱するまだ若い未婚の名取りである、先生は我が家と程遠からぬ處に住まひ、日々の往き來に最も都合よい處から、僕等老夫婦も、仲間に這入り、一家三人樂しく御稽古に精勵してゐるのも面白い。先生は唄も上手、三味線も達者、加ふるに頗る熱心で、三拍子揃つた御誂向きの師匠であるので、今は一週三回來て貰つて居る。勿論僕は唄だけで、身心の保養が目的だとは云へ、あまり記憶が惡くて、十數回繰り返し敎はるのが氣の毒でならない。妻は三味線も習つてゐるが、僕より少しは覺えがよい、英子は子供だけに一番早く覺えるが、復習を厭ふのが缺點である。僕は鶴龜、操り三番叟、五條橋、花見踊を終へ今八犬傳、楠公、橋辨慶に精勵してゐる。

運動としては、散歩とラヂオ體操だか、ラヂオ體操はやゝもすれば、全員一致の行動が取れぬことがあり、又時に御流れとなることもある。散歩は毎日一定ではないが、氣に向いた時は、朝三時頃から月を踏んで出懸けることもあり、又電車で遠出することもある。血壓は高かつたが、閑居以來餘程降下し、今では百五十位が普通である。それでも溫泉や入浴場では、安全第一主義を取つてゐる。

僕は退職後、寫眞を道樂とした。やれば上手になり、面白味が出て來るが、現像と燒付とは、大變手がかゝるので、撮影だけに止めてゐる。僕のモデルは來訪者で人物が多く、場合により寫眞機持參で、親類巡りをやることもあるが。只何とはなしに寫眞ブックに貼り付けたいが爲めである。

酒は發病以來絕對に禁止し、已むを得ない時でも、炭酸水位で御茶を濁してゐる。今では匂ひもいやとなつた。世間往々にして酒は止め難いと聞くが、健康の爲めなれば、容易に止め得らるゝ事を體驗した。

煙草も發病以來禁煙の場合が多い。絕對とは云はぬまでも、大部分は止めて來た。目下も止めてゐる。これも保健の爲めとなれば易々たるものだ。人間は眞に必要となれば、如何なる我慢も出來得るもので、只眞に必要と感じないまでのことだ。僕は果物と菓子類は晩食後食べるが、これは自然に任せてゐる。

元來酒を用ゐない家庭は、晩食が早く濟んで興が少ない。其上僕は無口の方だから尙更だ。僕は今家庭中唯一人の男で、いつも聞き役を承り、話は他の皆に花を持たせてゐる。

讀書は、新聞と雜誌で、堅苦るしい書物は讀んでゐない。「ラヂオ」は「ニュース」と講談を喜んで聞く、他は一向感じない。それでも長唄と漫才は格外で、特に漫才は大阪辯で滑稽味があり、面白い處がある。

僕は庭いぢりは好きでないが、見ることは樂しみの一つである。それが爲め必要なる手入はやらせ、池の水も月に一度は換へてゐる。又金魚には時々餌を與へて喜ばしてゐる。僕の內は家に比べて庭の勝つてゐるのは、それが爲めである。

僕は骨相學者、石龍子の門を叩くことが屢々ある、之は大正三年以來のことで、別に信仰と云ふ譯ではないが、只骨相で其人の性質が分るから、面白いだけだ。石龍子は之を基礎として僕等に缺點と注意すべき點を敎へて吳れる、僕は毎年一度は必ず行つて相談する、隣りの大野技師も同行することが常例だ。

僕は東京に來てから約三十年、川崎大師の參詣を缺かしたことがない。明治神宮の參拜も元よりである。これ神佛を尊ぶことは人間最高の道德だと信ずるからだ。

僕の健康は外觀頗る頑丈に見えるが、內容は之に添はない。自覺症狀として、早老性著しく、耳鳴り、遠視、目まひ、疲勞、便祕、其他、脚の不自由などあつて、年の割合にぼけてゐる、易者は僕を八十歳の壽命ありと云ふも、それこそ當らぬ八卦であらう。孰れにしても僕としては只油斷なく、延命に努むるのみだ。

僕は子供の時より豆腐は好きで、今でも殆んど毎日の如くに用ひて居る。實際豆腐は、純白で、四角張つても、柔かく、內容外觀同一で、然も滋養に富んでゐるから、申分のない食料品だ、若し之をさへ食べない人があるとすれば、それは喰はず嫌ひか、我儘勝手の人と信ずる。

近頃支那問題や、露西亞の軍備問題で、非常時に輪をかけて騷いでゐる。誠に困つたものだが、此等は決して當座の感情のみに訴ふべきものでなく、宜敷國民外交、輿論外交で、全部の國民が是なりと信じ得る問題を提げ邁進すべきである。決して露骨な態度を速急に用ゐてはならぬ。要するに國力の發展と軍備の充實とが自然に解決をして吳れるから、今は猥りに世界に孤立して反感を買ふ時でないと信ずる。

最近起つた事件で、驚くべきものが二つある。それは尾去澤問題とスペインの內亂である。

尾去澤に起つた、「ダム」決潰事件は、之は萬々當事者の不注意に歸因すべきものであつて、大なる責任問題だと考へる。僕は今輕々に論ずる資格はないが、千人に近き生命を奪つた責任者は、たゞで濟ます譯には行くまい。僅々二、三人の殺人事件でさへ、兵力にまで及ばんとする今日の時勢に、斯る大々的殺人罪を敢てしたる責は、果して自然が負ふべきものか、不可抗力が負ふべきものか。

スペインの內亂は、如何に人民戰線と國民戰線との衝突だとしても、同胞相食むの醜體を演ずるに

至つては、誠に見るに忍びない。何たる悲慘の極であらう、尤も支那では、今日でも同胞打ち合つて、戰爭を商賣としてゐるのは、敢て珍らしくも思はぬが、國家意識の明瞭なる然も世界文化の本場たる歐洲に於て、今日斯る戰爭を起さねばならぬ理由が、不幸にして僕等の頭にピンと來ない。それにしても恐るべきは、思想の相違であり、間違つたる信念であらねばならぬ。今や赤化の手は眼前に迫り、膝下に喰ひかゝつてゐる。然し今からでも決して遲くはない。反省すべきは、權力の濫用と金力の偏重であると信ずる。

近ごろ三十七年振りに、僕を尋ねて來た男がある。それは少尉時代に新兵として僕に敎はつた人だつた。彼は立派な紳士で、昔を偲び、御無沙汰御詫び旁々來たと云ふ。僕は厚意を謝し、數時間懷舊談に耽つた。彼は信仰心に厚い人で其持參の鞄の內に、磬若經と觀音經が入れられてゐるを見てもわかる。それは、

「目下政黨と軍人とは握手が出來てゐない。然るに在鄕軍人中には多數の政黨員がゐる。卽ち政黨員は在鄕軍人なる事を思ひ、此際軍部は、度胸を示して、政黨と提携して貰ひたい。政黨は過去の非を悔悟してゐるから最もよい機會だ」と謂ふにあつた。僕は今軍部の當事者でないから謹んで承つたが、さてどうであらうか、軍人は世論に迷はず、政治に關はらざる處に眞實があり、又比較的公平に行けるのでなからうか。僕は堅く信ずる、軍人は眞に、陛下の股肱として恥づることなき言動を以て只管、國民精神の作興に當ることが本然の勤であらねばならぬと思ふ。

之れより間もなく、窮餘のあまり恥を忘れた一婦人に來訪された。彼女は十數年來消息不明だつたので、僕等夫婦は此珍客を丁寧に歡待した。然るに豈計らんや、今は奈落の底に沈み其日の生計に窮する彼女だつた。彼女は某勅任官の未亡人であり、扶助料を有する一人暮しの身なるを信用し、まんまと金二十圓を騙られ馬鹿な目にあつた。これも、女一人の淋しさから來た惡い男の行爲ではあらうが、恨むよりむしろ御氣毒に思うた。

僕は十一年三月十八日生れた、初孫を喜んだ。數から云へば三番目だが、前二人は死產同樣で問題にならない。此初孫は名を則子と稱し、貞子の生んだ第二女である。今は滿七ヶ月で二貫數百目であるのも樂しい。

僕の居室に二つの書が揭げられてゐる。

一は、寺內元帥のかゝれた、

「宣り給ふ、五つの敎へ、かしこみて、護れ我がとも、皇御國を」

二は、土方伯爵の書かれた、

「養心、莫善於寡慾」

である。一は、軍人勅諭を意味したもので、二は「心を養ふには、慾を寡なくするより善なるはな

し」との意味である。今日利慾の爲めに身を亡ぼし、國を忘るゝ人の多い世の中に、何んと意義ある指針ではないか、僕は以上の二つを座右の銘とし、少しでも之に近からんと努めてゐる。

豫て婚約者だつた、高野よし野と、長男武文との結婚式は、去る十月二十九日、鄕里金澤で擧げられた。式は嚴肅に、親兄弟と之に準ずる人々のみで行ひ、直ちに祖先の墓に報告し、終つて同市の料亭で宴を開いた。僕は席上左の希望を一座の前で述べた。

第一、僕は十九歳の時此地を出たが、數へて見れば四十年になる。然も三十年は東京にゐたから東京に親戚知己のあるのは當然である。本晩の新郎も東京で生れ、東京で中學を卒業したから、之又緣故深い土地である。然るに今回特に金澤を撰んで式を擧げたのに深い理由がある。それは一つに祖先を崇拜する觀念から來てゐる。祖先を崇拜せず、先代を思はざる家は滅ぶると云つても過言でない。申すも恐れ多い事ではあるが、我が

皇室に於かせられても、卽位の大禮は京都の地に於て行はせられる。其他皇室の御事や、國家の重大事は悉く伊勢の神宮に報告され、若しくは祈願さるゝを常と拜する。斯くあつてこそ、我大日本帝國は、いや榮に、天地と共に窮まりないのである。家門の繁榮も祖先を思ふの念から來る。僕は特に新郎新婦に祖先崇拜の念を鼓舞したい。日常の生活に於ても、勤めの關係に於ても、なまけて見たいと思ふことはあるだらう。然し斯くすることは、祖先に對して相すまぬ。家門を穢すことになつては相ならぬ、と考へ直すことが必要である。僕は決して、親孝行を求むるものではないが、親の心を安んせしむる程、此世の中に尊い、然も愉快な氣持のないものなるを告げて置きたい。

第二、次に希望したいのは冠・婚・葬祭の場合に於て、華を去り實につくことである。僕はよく聞くことだが、娘三人嫁入さすれば、親の身代は潰れると云ふ。又年頃の娘が嫁入り仕度の出來ないので、カフエーの女給となる人のあることを知つてゐる。一生一代の儀式は神嚴であらねばならぬが、然し御祭騷ぎの必要はない。僕は此度の儀式に、兩親竝に兩親に準すべき方々に限り、御足勞を御願したのも之が爲めである。此二件はよくよく承知して貰ひたい。

之が僕の所信であり希望だつた。

斯くして其晩早くも九時の汽車で、新郎新婦は出發し、途中山中溫泉で若干保養し歸神せしめた。

第十八、僕の心境と一家言

第一、宇宙觀

人間の力には限りがある。いくら學問が進んでも、宇宙の實體を知り得る筈はない。廣大無邊の此宇宙は、空間も時間も無限であつて、一種不可思議の神祕に包まれてゐる。此不可思議なる神祕の實體は、如何に慢心の學者も、未だ分つたとは聞かない。今でこそ、宇宙は有機體であると考へ

るまでに進歩したが、これとて其正體が分つてのことでない。一體有機體の本は、人間だと思ふが、これとて手足がなくても、臓腑の一部が其作用を停めても、人間は依然として人間で、生きて行けるから、人間必ずしも機關の有無に關係しない。只生命の主體たる自我さへあれば、それで立派な有機體となる。自我と云ふのは、自令で自分を始末つけること、卽ち運營して行ける力のあることだから、宇宙を有機體と思ふのは當然のことで、僕も確かに斯く信じてゐる。實に宇宙は自我を持つ立派な有機體であつて、人類の如きは此神祕極まりなき宇宙の一部を構成する、寄生物に外ならない。從つて靈妙不可思議なる生物は、神秘の宇宙と靈氣相通ずる同心一體のものと信ずる、僕の宇宙觀は以上の如くで、靈魂不滅の信念も宿命論も、皆此大自然の結果から來てゐる。

第二、人生觀

凡そ日本國に生れ、日本人たるものは、日本帝國を護り之を永久に傳へ、以て現在の臣民竝に將來の臣民の幸福を計るのが御互に大なる義務だと思ふ。從つて、義と、利とは混同してはならぬ、義は天理の宜に從ふ大丈夫の道で、利は人情の欲する小人の道である。云ふは易く行ひは難い。小人動もすれば利の爲めに義を沒し易い。日々新聞の記事は、見苦しき此の種の報導で賑つてゐる。誠に遺恨の極めである。日本人には、日本人傳統の精神がある。如何に窮すればとて、大義明分を忘れてはならぬ。之を詮じ詰むれば「恥を知れ」の一語に盡きる。

然し人間此世に生れた以上、生活は愉快であらねばならぬ。不愉快であつてはならぬ。さて其愉快、不愉快は、何で極めるか、當人自ら不愉快としても、他人より見て不愉快なのがあり、當人自ら不愉快でも、他人より見て愉快なのもある。土方や、立ん坊など、さぞ不愉快だと思ふ人もあらうが、中々さうではない。一、二合の濁酒で、活惚れの一つも踊る氣分は、「實に愉快極まるものである。之に反し、金殿玉樓の中にあつても、無限の憂ひに沈んでゐるものが大いにある。さあ人生として何れがよいのであらうか、然し兎に角、生れた以上は、「生れ甲斐があつて面白く愉快に暮らして欲しい」而して、「少しでも國家の爲め社會に役立つて欲しい」と考へる。さて、「少しでも國家社會の爲め役立つ」と云ふも、兵役に服する人や、納税負擔者はそれでよいしても、一億に近い民衆は、如何にせば、よいのかと迷はざるを得ないが、それは只、「人樣に迷惑をかけないで暮らせ」と云ふに過ぎない。

此が僕の人生觀である。

第三、不平

世には隨分と不平を抱くものがある。下女、下男にも不平があれば紳士淑女にも不平がある。大官富豪には更に大きな不平がある。而して大抵の場合は、自らを咎めずして、周圍が自分の思ふ樣にならぬを不快とする。例へば某は同窓生だが、其成績不良だつたにも關らず、今自分よりも幸

運にあるとか、其他種々あるが、不平も程度もので少しの間は愛嬌にもなるが、それが本式になると、聞く人も不快になり、本人だとて一つも結構でなく、損をするばかりである。

第四、自惚れ

自惚れと云ふのは、文字通り、己れ自らに惚れることで、惚れては「痘痕も靨に見える」の譬の如く、自らの缺點が靨に見えて、他人より見て缺點か明かであつても、得意がつてゐる人がある。自惚れも程度を越えると、「沒分漢」となり、世人から葬られるから、之れ又大に考へねばならぬことである。

第五、謙遜

人間として望む處は、謙遜であつてほしい。素直な、優しい心を以て、他に對するとき、其處によく凡てを理解し、凡てを尊敬することが出來る。天地萬物これ皆神の出現だと思へば、內に謙遜の心と、敬神の心が起り、何物に對しても尊敬を拂ひ得る筈だ。子供に對しても、女中に對しても、禽獸草木に對しても、皆尊敬の心を持つ樣になる。尊敬の心は、やがて感謝の心となり益々たのもしくなる。勞働者を理解し、之を尊敬する資本家は、「御苦勞樣」と感謝することが出來る。さうした心は、子は親に、親は子に、先生は生徒に、生徒は先生に、男も、女も、青年も、老人も皆悉くを幸福ならしめ、社會も、家庭も自然に瑞氣が滿ち〳〵て來る。實に謙遜は平和の母である。然し云ふまでもなく、これは心からの謙遜でなくてはならぬ。

第六、犧牲心

犧牲心は、繁榮の親である。親は子の爲め、子は親の爲めに、互に犧牲心を發揮してこそ、一家團欒、子孫は榮える。銘々が勝手ばかりしては、遂に國家はび、家は潰れる。犧牲心の最も强固なるものは、軍隊であり、彼等は實に生命を犧牲とする國家の寶である。然るに世間、まゝ、此尊い犧牲者に對し、敬意を盡くさざるものあるは、遺憾千萬である。

第七、虛榮心

虛榮心を撲滅すべき對策を講ずることは、目下の社會に於て急務だと思ふ。僕は金持や、女優や花柳界の婦人連が、美衣を纏ひ、人に見せびらかすのを、敢て惡いと思はないが、之を羨ましく思ひ、之に追隨せんとする一般社會人の心裡を淺間しく思ふ。僕は敎育と宗敎との力により此等虛榮心を撲滅することが社會民衆の爲め極めて必要だと思ふ。第一如何に自然の發露とは云へ、菊五郎でもない二流三流の俳優が、總理大臣以上の給料を取る如きは、質實剛健の立場より見て、感心した現象ではないと思ふ。又企業家も、もう少し金の分配について、民衆心裡を察して貰ひたい。

第八、克己心

人間は克己心が必要だ、これは知つてゐても、中々出來にくいものではあるが、せめて必要に際

してなりと、やつてほしいものだと思ふ。謙遜も、犧牲心も、畢竟するに同じ處に歸著するが、何れも禮儀の根元であり、人格の主體ともなるべき人間修養の第一義である。

第九、子供の教育

子供の教育は、甘くてもいかず、辛くてもいかず、六ヶ敷いものなるは云ふまでもない。然し少なくとも兩親の揃つた內の子供は、辛い方がよい樣に思ふ。結果から見ても、甘い方より辛い方のものがよいのではなからうか。

僕は、甘まつたるい子供は大嫌ひで、又それを喜んでゐる親心もすかない。今日、十一月號のキングを讀んだが、中にこんな記事が載つてゐた。

內閣書記官長、吉田茂氏の目白の自邸は、川村女學院の橫裏の可なり奧まつた處にあり、大通りより玄關まで約一丁程歩かねばならなかつた。それで、天氣のいゝ日はよいが、雨でも降ると、如何なる名士も磨き立てた靴を氣にしながら、行かなければならぬので、家人は

「不便で、いけないから、せめて自動車の入る位までに附近の土地を買つて道をひろげませう」と提議すると、吉田氏は、そんなことは無意味だと云ふ樣な顏して、「わしが、自動車に乘るから、ワザ〳〵かうしてゐるのだ。家の親父は、毎日自動車で役所に通つてゐると云ふことを目の前で、子供に見せると子供は、生意氣になつて、よろしくないのだ、近所の子供も、吉田の親父は偉い人だなァなんて持ち上げる樣になる。子供の教育上、道はせまくても此まゝだ。」

と云つて、子供の教育に苦勞してゐると書いてあつた。僕は之を批評するのではないが、斯くまでに子供の人格養成に力を入れてゐる吉田氏には全く同感だ。

第十、運、鈍、根と感謝

僕は一生を暢氣で、樂觀的に過したかの如く見えるが、必ずしも他から見る程でなく、實は內氣な心配性で、加ふるに極端なる遠慮家である。從つて自然に、運、鈍、根の信者となり、永く之を守り本尊として來た。病氣に罹つてからは、根氣もなくなり、今では、運、鈍によつて支配されてゐるが、根氣が人間渡世上大事なものなるは云ふまでもないが、玆に一つの例として、

山形縣東鄕小學校で、日露戰役戰捷記念事業として、明治三十八年から全校兒童に一ヶ月、一錢宛の貯金を勵行して來た。爾來三十二年、幾度か校長は變つたが、この鐵則は變らず、昭和十一年三月現在に於て、實に六千五百七十四圓六十二錢に達してゐる。これをいつまで續けるかは、關知の限りでないが、よくもこゝまで根氣よく續けたものだと感服した。

僕の生涯は幸運だつた。若し此世に生き殘ると云ふことが幸福だとすれば、確かに、僕は五十八年まで生き殘つた幸運者の一人だ、敢て長壽とは云はないが、それでも生き殘つたと云ふ資格は十分にある。なぜなれば、僕は日露の役に彈丸雨飛の中を潛つて無事に歸り、又最近、腦溢血と云ふ

恐ろしいものに危く助かつた。更に、同期の中學卒業者二十四名中、今は半數以下の生存者中に數へられ、士官學校同期の七百名中、三百二十五名の殘存組にも加つてゐるからだ。

僕は今、江古田の里に自適してゐるが、これも恩給と年金の御蔭であり、之を幸福と云はずして何と云へよう。

僕は毎年四大節の一つには、宮中の御宴に召されてゐる。又觀菊や、觀櫻の御會にも御召に與つてゐる、申すも畏き極ではあるが、至尊の御前に於て御側近く、座席を賜り、酒肴を戴くなど、之を幸福と云はずして、何と云へよう。

僕は本年二月十一日、紀元節の御宴に召されたが、膳部のものは持參の上、常の如くなるべく廣く分つことにしてゐるので、六勢津先生を招き、一同忝しく此日の佳節を祝し、卓を圍んで御料理を頂戴し、終つて燒鯛は先生のもとに屆けられ、親父の前に擴げられた。喜んだのは親父の喜三郎氏で、此光榮を永久に保存したいと云つて、鯛は遂にミイラとなり、氏の常住地たる北海道に持參された。此尊い氏の皇恩に對し僕も大に面目を施した。

僕は今、一代の過去を顧み、皇恩、親恩、社會恩の有難さを喚起し、

毎朝、佛壇に、燈明を上げ、天地萬物の一切に對し感激してゐることを告げ、以て此稿を終ることゝする。（終り）

第十九、僕の經歷及兵籍

年	西暦	年齢	月日	經歷事項
明治一二	一八七九	一	四、三	石川縣金澤市下堤町四十一番地に生る
同　一四	一八八一	三		柴田家へ入籍
同　一九	一八八六	八	四、一	金澤市松ヶ枝町男兒小學校入校
同　二〇	一八八七	九		柴田家より長谷川家に復籍
同　二一	一八八八	一〇	四、一 五、一〇 九、一	金澤市西町尋常小學校に轉校 金澤市安江町七十一番地へ轉宅 城西信莊氏につき漢學を習ふ
同　二三	一八九〇	一二	三、三〇	西町尋常小學校卒業
同　二四	一八九一	一三	九、一	共立尋常中學校豫科入學
同　二五	一八九二	一四	九、一	本科第一年に進入
			三、三一	石川縣尋常中學校卒業

同三〇	一八九七	一九	九、一
			一〇、七
			一二、一
			第四高等學校第一部第一年に入學(法科)
			士官候補生を命ぜられ、由良要塞砲兵聯隊に配屬
			由良要塞砲兵聯隊第五中隊へ入隊
同三一	一八九八	二〇	四、一
			六、一
			八、二三
			九、一
			一二、一
			上等兵の階級に進む
			砲兵二等軍曹の階級に進む
			見習作初めて秘務屬任官
			砲兵一等軍曹の階級に進む
			陸軍士官學校入校
同三二	一八九九	二一	一一、二一
			一一、二七
			陸軍士官學校卒業
			見習士官を命ぜらる
同三三	一九〇〇	二二	六、二二
			七、三一
			任陸軍砲兵少尉、由良要塞砲兵聯隊附(深山大隊)
			敍正八位
			九、一
			陸軍戸山學校入校
			一〇、三〇
			同校修了
			一〇、三〇
			大阪弔魂會贊助會員
一、六			陸軍砲工學校入校

同三五	一九〇二	二四	一一、一五
			一二、二二
			任陸軍砲兵中尉
			砲工學校普通科卒業高等科學生を命ぜらる
同三六	一九〇三	二五	二、二一
			八、四
			眞田一家金澤に歸住す
			一二、二二
			砲工學校高等科卒業
			一二、二五
			金澤市に於て結婚式擧行(三十七年七月五日入籍)
			一二、二九
			陸軍要塞砲兵射擊學校へ入校
同三七	一九〇四	二六	二、六
			二、一〇
			同校解散、二月十一日歸隊(門崎砲臺守備)
			五、一
			宣戰布告
			五、一一
			徒步砲兵第二聯隊編成下令
			七、四
			徒步砲兵第二聯隊大隊副官(第二大隊)
			七、一三
			神戸出帆
			八、二
			青泥窪上陸
			八、一九
			馬丁負傷
			本日より旅順第一回總攻擊參加
			一、二
			旅順開城
			二、一三
			兵站病院へ入院二月二十一日退院

同三八	一九〇五	二七	二、二七	本日より奉天大戰參加
			四、四	補徒步砲兵第二聯隊中隊長（第五中隊）
			五、五	任陸軍砲兵大尉
			六、一二	敍正七位
			九、一六	休職
			一〇、一六	平和克復
同三九	一九〇六	二八	一、三一	大阪砲兵工廠附被付（赴任延期）
			二、九	山頭堡出發
			二、二三	柳樹屯出帆
			二、一六	神戸港入港二、一七由良へ凱旋
			二、二二	復員下令
			二、二八	大阪砲兵工廠著任、同時に宇治火藥製造所附
			三、一	宇治へ著任
			五、三一	日本赤十字社正社員
			一二、七	本日の官報を以て論功行賞發表（四月一日、日附）
同四〇	一九〇七	二九	八、四	長女貞子出產
			八、二二	兄權作司稅官

同四二	一九〇九	三一	七、一〇	東京砲兵工廠附（赴任延期）
			八、二九	赤十字京都支部長より鐵瓶一個賞賜
			九、九	板橋火藥製造所著任
同四三	一九一〇	三二	七、一一	敍從六位
			七、三一	長男武文出生
同四四	一九一一	三三	五、二	分家す
			一〇、七	板橋分會名譽會員
大正二	一九一三	三五	六、一四	隅子朝鮮で　死
			八、一〇	濟生會長桂太郎氏より禮狀
			一〇、一五	二等給下賜
同三	一九一四	三六	八、二二	獨逸國に對し宣戰布告
			一一、七	青島陷落
			一二、一四	父病死
			一、二七	兄權作信子と結婚
			一、三〇	勳四等瑞寶章を授けらる
			八、一〇	敍正六位

同四	一九一五	三七	一一、七
			一一、一〇
			一一、一六
			旭日小綬章及金四百圓賞賜（大正三四年戰役）
			大禮紀念章授與
			大饗第一日饗饌を賜ふ
同五	一九一六	三八	一、二二
			二、一三
			三、三〇
			六、二
			七、九
			一二、二二
			岩鼻火藥製造所長代理を命ぜらる
			次女芳子出產
			特別賞與金貳百貳拾圓
			若鼻所長代理を免ぜらる
			次女芳子死亡
			一等給下賜
同六	一九一八	三九	三、三一
			七、二〇
			八、六
			特別賞與貳百拾圓
			在鄉軍人十條分會特別會員
			任陸軍砲兵少佐、補目黑火藥製造所長
同七	一九一九	四〇	一〇、三
			三女壽美子出生
同八	一九一九	四一	一、一七
			七、五
			一一、二七
			旱稻田大學講師囑託
			三女壽美子病死
			陸軍省兵器局御用掛を命ぜらる

同九	一九二〇	四二	一、二一
			七、二八
			九、一〇
			一〇、二
			二一、一
			一一、一
			財團法人從業員後援會理事就任
			壓磨室爆發す死傷者なし
			敍從五位
			麗斗藥工場發火一棟燒失、死傷なし
			戰捷記念章授與
			大正四年乃至九年戰役の功により金千四百五十圓を賜ふ
			同時に從軍記章授與
同一〇	一九二一	四三	七、二〇
			八、二二
			任陸軍砲兵中佐、補東京砲兵工廠庶務課長
			在鄉軍人會小石川分會顧問
同一一	二九二二	四四	一、三一
			七、二五
			敍勳三等賜瑞寶章
			住宅組合加入
同一二	一九二三	四五	四、
			七、三
			八、六
			八、二一
			九、一
			九、二
			一〇、一
			火工廠作業課長
			江古田の住宅組合地に移轉
			補板橋火藥製造所長
			作業課長事務取扱を命ぜらる
			關東大震火災
			本日より十一月十五日迄戒嚴に關する勤務に從事す
			本日より危險作業恩給加算實施さる

				作業課長事務取扱免ぜらる
同一三	一九二四	四六	一二、一五	任陸軍砲兵大佐
同一四	一九二五	四七	五、一	補陸軍造兵廠技術部長
			六、一八	陸軍技術本部御用掛を命ぜらる
			六、三〇	製鐵所囑託
			七、七	補兼陸軍造兵廠總務部長
			一〇、一	敍正五位
同一五	一九二六	四八	一、一五	補陸軍技術會議々員、免兼陸軍造兵廠總務部長
			五、一四	本日より朝鮮滿洲(安東縣)へ出張
			六、一五	歐米各國へ出張を命ぜらる
			八、五	神戸港出帆
			九、一	四女英子出產
			九、一三	佛國馬耳塞上陸
			一二、二五	大正天皇崩御
			一、一三	母病死
			一、一五	倫敦出帆渡米す

昭和二	一九二七	四九	二、一五	桑港出帆
			三、四	横濱歸朝
			五、一五	長谷川照子結婚
			一〇、六	貞子横井太郎と結婚
同三	一九二八	五〇	八、一〇	補陸軍造兵廠作業部長
			一〇、一	大禮使典儀部勤務を命ぜらる
			一一、一六	大禮記念章授與
同四	一九二九	五一	八、一六	長谷川照子病死
			九、五	昭和三年支那事變に於ける勤勞により金貳百六十圓を賜ふ
同五	一九三〇	五二	四、二三	帝國水難救濟會終身特別會員
			六、一二	朝鮮、滿洲へ出張
			八、一	任陸軍少將
			一〇、一五	敍從四位
同六	二九三一	五三	五、一	帝都復興記念章授與
			五、二一	白川大將の特命檢閲を受く
			八、一	補陸軍造兵廠火工廠長

		九、二九	製鐵所囑託を解かる
		一一、一二	本日より特別大演習陪觀
同七	一九三二	四	
		四、一九	瀧ノ川構内爆發す
		四、二九	輕き腦溢血に罹る
同八	一九三三	五五	
		一、一〇	軍需審議會委員を命ぜらる（内閣）
		三、一八	待命仰付らる
		三、三〇	豫備役被仰付
		三、三一	退職賜金下賜
		四、二八	特旨を以て位一級被進　敍正四位
		六、三	恩給證書下附
		六、二三	板橋防護團評議員、開進第三分團理事
		九、一	旭電化工業株式會社顧問
		一二、二〇	滿洲事變の爲め恩給加算一年九ケ月
同九	一九三四	五六	
		一一、九	恩給證書加算訂正再下附
		四、二九	加越能育英社正社員
		九、一八	昭和六年乃至九年事變に於ける功により勳二等瑞寶章及金千圓竝に從軍記章授與（以上四月二十九日附）
同一〇	一九三五	五七	
同一一	一九三六	五八	
		一二、五	大滿洲國記念章受領
		一〇、二九	武文、よしのと金澤に於て結婚

兵籍寫

一、兵種　砲兵

一、本籍地　石川縣、金澤市越中町二番地

一、氏名　戸主、長谷川鉄次郎、明治十二年四月三日生

一、出身別　士官候補生

一、服役　現役、明治三十三年六月二十一日ヨリ

一、妻　明治三十七年七月十五日婚姻（入籍）
東京市牛込區原町三丁目七十一番地
無職、眞田鈴　姉、ムラ

一、子　長男　武文　明治四十三年七月三十一日生
四女　英子　大正十五年九月一日生

一、位階　明治　三三、七、三一　正八位

同　三六、二、二一　從七位
同　三八、六、一二　正七位
同　四三、七、一一　從六位
大正　四、八、一〇　正六位
同　九、九、一〇　從五位
同　一四、一〇、一　正五位
昭和　五、一〇、一五　從四位
同　八、四、二八　正四位

一、勳等功級明治　三九、四、一　功五級
同　三九、四、一　旭五等
大正　四、一、三〇　瑞四等
同　四、一一、七　旭四等
同　一一、一、三一　瑞三等
昭和　九、四、二九　瑞二等

一、官等明治　三三、六、二二　砲兵少尉
同　三五、一一、一五　砲兵中尉
同　三八、五、五　砲兵大尉
大正　六、八、六　砲兵少佐
同　一〇、七、二〇　砲兵中佐
同　一三、一二、一五　砲兵大佐
昭和　五、八、一　陸軍少將

一、賞

大正九年十一月一日戰捷記念章授與
昭和四年九月五日、昭和三年支那事變に於ける勤勞に依り金貳百六拾圓を賜ふ
昭和六年五月一日帝都復興記念章授與
昭和十年十二月五日大滿洲國建國記念章授與
其他敍勳、行賞、從軍記章は本文に掲げあるを以て省略す

一、刑罰

大正二年十月二十一日監督不行屆の爲謹慎一日に處す(高壓力の獵用火藥拂下の爲め)
但大正四年軍令陸第十五號により懲罰免除
昭和七年四月十九日業務掌理不行屆の爲譴責す(瀧の川構内爆發の爲め)
但昭和九年軍令陸第一號に依り懲罰免除

一、履　歴　前記の通りにつき略す

第二十、家族に對する將來の希望

將來の希望と題したが、死後の希望が含まれてゐる。死後の希望を遺言と云ふが、僕は普段より示して置くも差支ないと思ふ。又公開するも苦しくはない。況んや秘すべき何物も持たないから尙更である。

左に二、三の希望を述べて置く。

第一、我なき後も此希望は容れて貰ひたい。

第二、僕は金も殘さず、借金もせなかつた。相續人たるもの、大學卒業だけを親より貰つたものとし裸一貫より出發し大に奮鬪して欲しい。如何なることあるも、收入に應ずる生活以外借金してはならぬ。

獨立獨歩、自給自足は、實に我が家の家憲である。決して人を賴る勿れ。又貸金と雖も、禁物と心得よ。

第三、英子は晩年に生れた末子で、兩親に別るゝ年齡は他の兄弟に比し早い。之を一人前とすることは、唯一の務めである。母に於て全力を盡して欲しい。

第四、妻には若干の扶助料が下る。これは僕の功績に對する賞賜だから、主として本文の希望の用途に當てこれが支途については、妻以外如何なる人の容喙をも許さない。

第五、僕は鄕里の墓地に埋葬を望む。

葬儀一切質素なるを要す。死者に對して禮義を缺くは、道にあらざるも、金の光りによる葬儀の華麗は、身分なき人のやる事で、自分としては已に、勳位、待遇を受くるの身分なれば、これ以外如何なる裝飾をも望まない。

第六、僕は戸主で一家を創設したが、兄の家に嗣子がないから已むを得ざれば、武文でも、英子でもやつても差支ない。又之が爲め、此家は廢滅してもよい。一代限りでも文句はない。

第七、親讓りの扇面の屛風は、猥りに處分してはならぬ。

第八、三人の兄弟互に協力し、母の孝養を忘る勿れ。

昭和十一年十二月廿三日印刷
昭和十一年十二月廿八日發行

五十八年史

〔非賣品〕

不許複製

著作者　東京市板橋區練馬南町二丁目三六二九番地　長谷川鉄次郎

印刷者　東京市板橋區練馬南町一丁目三五三二番地　粒針保身

印刷所　東京市板橋區練馬南町一丁目三五三二番地　株式會社日本印刷局

342
1006

終